

## 南丹市「学校教育環境整備等検討委員会」中間まとめ

急速な少子化の進行という全市的な現状を踏まえ、南丹市の将来を担う子ども達の「豊かな学びと育ちを促し、たくましく生きる力を育むための教育環境の在り方」を検討するため、本検討委員会が諮問を受けた検討項目は下記である。

### 【検討項目】

#### ■豊かな学びと育ちを促し、たくましく生きる力を育む小学校の教育環境の在り方について

～検討を加えるにあたっての3つの視点～

- ① 校種間連携の視点から
- ② 学びと育ちを促す人的環境としての「集団」の視点から
- ③ 学びと育ちを促す物的環境の視点から

### 【豊かな学びと育ちを促す校種間連携の推進について】

本市における中学校ブロックを単位とした保幼・小・中学校連携推進事業は、学びと育ちの連続性という視点から、また、小・中学校の学びの段差解消という点から有効であるという考え方で議論を進めた。

少子化が進行する南丹市においては、地域の特性や資源を生かした校種間連携の取組や、人と人とのつながりを深める同年齢や異年齢での交流の取組は、人間性や社会性を育む上で必要なものであり、地域の将来を担うことができる豊かな学びと力強い育ちにつながるものであると考える。併せて、保育所・幼稚園と小学校をつなぐ「もうすぐ1年生体験活動」も、遊びを中心に据えて育ちを促す保育所・幼稚園における保育・教育と、教科を中心に据えて学びを促す小学校教育との段差解消に有効な取組であると言える。したがって、今後とも、豊かな学びと育ちを促す校種間連携のより一層の推進を強く求めたい。

### 【豊かな学びと育ちを促す人的環境としての「集団」の在り方について】

少子化の急速な進行により、市内の多くの小学校において学級集団の小規模化が進行している中、多くの仲間とともに嬉々として学び合い育ち合う姿こそが教育のベースであるという考え方を軸とし、子ども達の豊かな学びと育ちを中心に据えて、本市小学校における望ましい学習集団の在り方について議論を進めた。

望ましい学習集団については、「先生も力を存分に発揮できる」とともに、何よりも「子ども達が思う存分に力を発揮できる」集団であることが、豊かな学びと育ちにつながる学習集団であるとする。この観点に立って、様々な学習場面や学び合いの場、例えばバス学習（小グループによる話し合いを通じた学習）や班学習、球技スポーツや音楽の合唱・合奏の学習など、小学校の教育内容や方法を教育的かつ総合的に判断する時、望ましい学習集団の規模としては、少なくとも18名～20名程度は必要であるとする。

### 【豊かな学びと育ちを促す物的環境の在り方について】

「学校の安全・安心の確保は、学校経営の基盤である。」という共通認識の上に立ち、子ども達の安全確保に向けた学校施設の耐震化、様々な施設面での工夫・配慮の内容等、安心して学習に取り組める学習環境に関する物的側面に関して、〈安全・安心への対応〉〈情報化への対応〉〈環境への対応〉といった3つの視点を持って論議を進めた。

豊かな学びと育ちを促すに相応しい学習環境につながる施設・設備整備の内容についても、〈学習〉の対象として捉えることから検討していく必要がある。この教育的な視点を踏まえて、地域と連携した命を大切にすることを最重要課題とした安全面での環境整備が急務であり、健康面においても充分配慮する必要がある。また、地域連携の取組や施設整備、福祉の視点を含めた施設のバリアフリー化、環境教育の視点からのエコスクール化、情報教育の視点からのICT化の推進など、今後の学校教育環境の整備の在り方や地域の特性を踏まえた整備については引き続き検討が必要である。

平成23年10月5日

南丹市「学校教育環境整備等検討委員会」